■表音文字の発生

ムーア・ハウスは、表音文字の誕生を次のやうに説明してゐる。「一つの物体が示されると、例へば一本の木は二つの方法で表現することができた。第一は文字、すなはち木の絵文字によって、第二は、言語すなはち（英語の tree ツリーのやうに）木に対応する話し言葉によって示される。しばらくの間、この二つの表現形式が用ひられたが、（この表現に御注意頂きたい。文字の“木”は、言葉の“木”を表したものだと私は思ふのだが、ムーア・ハウスは、文字の“木”も、言葉の“木”も、共に“木”その物を表したのだと言ってゐるのである）その後、絵文字は、木といふ自然物を意味するだけでなく tree といふ言葉を口にした時の音（おん）をもあらはす、といふ考へがあらはれた。かうなると、内容からいって tree といふ物体には無関係なところで tree といふ言葉をはなす時に発する音をあらはす（何を言ってゐるのか解らないといふ方のために、こんな言ひ方をしたらお解りになるだらうか。『tree といふ文字を“木”といふ意味を表したものとせず、tree といふ発音を表した文字として使ふ』）ために、絵文字を用ひることが可能になった。

そこで、『わなにかける』trepan ツレパンといふ考へを示すやうな記号をつくりたかった場合を仮定してみたまへ。（これは一つの絵文字、または表意文字によるかぎり、即座にできはしなかったらう）、“木”を表す文字 tree と、“鍋”を表す文字 pan とを一つに合せて、それには、tree といふ絵文字と pan（パン）鍋といふ絵文字とが一つに合して、その言葉の音を読み手に与へて、はじめて先の要求に応じたのであらう。この種の記号は、音をあらはすために、音標文字（フォノグラム）とよばれ、これを用ひる書き方を表音式（フォネチック）といふ」と。

これを読めば、ムーア・ハウスは、「木を表した文字も、木を表した言葉も、木その物をそれぞれ直接に表したものであるから、文字と言葉の間には何の関係も無かった」と言ってゐることが解る。「文字はもともと表意的なものであり、表音的なものである言葉とは無関係だった」と言ふのである。

ところが、“そのうちに”文字が“音をも表す”といふ考へが現れた」と言ってゐる。これによって、「もともと音を有だなかった文字が“音をも表す”といふことは、文字の進歩である」といふ理論を展開させ、表音文字なるものを文字使用の過程で発展的に生じたものだと評価してゐるのである。

然し、この用法は、紛れもなく、漢字における“仮借”と全く同じものである。ただ、異ってゐる点は、漢字においては、「文字は消える言葉を保存するために創作したものであるから、初めから言葉を表したものであ

るとして、“意味”と“発音”との両者を兼ね備へてゐた」と考へられて居り、“仮借”は「文字の有つ意味に関係なく、発音だけを借りる用法であるから、文字通り“仮りに借りる”便法である」としてゐることである。